

アナログ一本化テープの処理はじまる



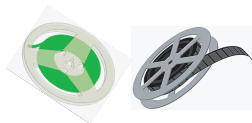
RSKの放送ライブラリーセンターには、1987年9月1日以来のニュース素材一本化テープがあります。このうち、アナログのβcamで保存されている2002年8月以前のテープは合わせて約9800本。再生するだけでも2090時間かかってしまいます。しかし、一本化テープはデイリーニュースの編集テープをダビングしているために、いわゆる「孫画像」となっており、劣化が早く進む上に使用頻度が高く、一日も早いデジタル化が求められていました。

ライブラリーセンターでは、苫田ダム処理が終わった編集卓で、この作業により手付けたわけですが、収録内容を記録した箱書きがデータラメだったり、箱に書いてある内容が収録されていなかったりと、早くも様々な障害が出ています。

ところで、このデジタル化に必要なコストは、テープ代だけで1200万円近くかかってしまいます。センターの予算規模と編集卓の空き状況から見て、このデジタル化作業を終えるのには少なくとも10年以上かかりそうです。現在の記録メディアの進歩から見て、作業中にメディアが次の世代に替わるのは間違いありません。

記録メディアの歴史

④「1/4インチオーディオテープ」



RSKの由来はご存知の通り「ラジオ山陽株式会社」の頭文字をとったものです。その名の通りわが社はラジオ局としてスタートしました。その当時録音メディアといえば巾1/4インチ、一般に6ミリと呼ばれる茶色い色をした磁気テープだけでした。

磁気を使ったプラスチック製のテープは、1936年にドイツで商品化されましたが、それを録音メディアとして普及させたのは、その2年後に日本人が開発して特許を取った「交流バイアス」という技術だそうです。日本で最初に作られた磁気テープは、狸の毛の筆を使って、和紙に酸化鉄を塗ったものだったといえますから、隔世の感があります。

ラジオ山陽では創立当初、アセテート盤を使ったディスク録音機を導入しましたが、まもなく東通工（現在のソニー）製の1/4インチテープに換わっていきました。取材に使っていたのは、同じく東通工製の、電池と手巻きのゼンマイモーターを使ったM型録音機、通称「デンスケ」といわれるものでした。残念ながら手巻きデンスケはもうわが社にはありませんが、電池式のデンスケは最近まで取材に使われ、現在資料としてセンターに保管されています。



最近まで使われていたデンスケ

1/4インチテープは、その後ベースの改良や磁気表面へのコーティングなどといった進化を遂げ、しなやかでしかも引っ張りに強い、成熟した記録メディアに成長しました。

しかし、デジタルテープやICレコーダーなど、時代の波の中で需要が減り、遂にソニーでは2002年に国内生産を打ち切ってしまいました。



苫田ダムテープの処理終了

昨年1月から行っていた「苫田ダム」関連のデジタル化作業が、開始から1年4ヶ月後の今月ようやく終了しました。

U-matic、1インチ、βcamと、多種類に渡ったテープは全部で1010本。古いものはすでに画像に痛みが来ていました。

これほど時間がかかったのは、デジタル化する上で画像が安定しないものがあり、調整に手間取ったのと、デジタルテープのコストでした。テープ処理に支出したテープ代にかなり掛かり単年度ではとても負担できませんでした。